

「常若甲子園」という取組

―サステイナブルな日本を取り戻す

福岡教育連盟発行「良師良友」 令和4年 第58号より転載

この本←ご存じですか？

―初めて見ました。

島根県の沖ノ島で、島前高校だっけ？

―はい。知っています。

はい。離島を元気にする高校教育を瀬戸内海の離島、広島県立大崎海星高校で取り組んだ経緯がかかれています。島前高校はどちらかというと、良い大学にも行けることで有名ですよ。

―昨年の『良師良友』で、合田哲雄さんのインタビューの中に島前高校の岩本さんの話が出てきます。大崎海星高校は専門誌にも取り上げられて知っています。

この高校のやり方は郷土の社会人との触れ合いと高校生の実践経験が中心になっていて他の高校に应用が利きやすいと思えます。

―(本をめくりながら)平川理恵さんっていう広島教育長さんは凄腕だそうですね。

らしいですね。

―冒頭に荒瀬克己さんが解説を書かれていますね。京都の「堀川の奇跡」を起こされた方です。

解説は心に沁みました。

―合田さんには連絡取られましたか？ 内閣府に移られましたよ。

連絡するつもりです。全国をあちこち回って今年はもう暮れてしまっていますね。

―あちこち…、宗像もそうですね？

宗像市役所は来週ですから福岡は二往復です(笑)。(P&B)を開いてスケジュール帳を見ながら)三重県、富山県。愛媛県は四つの高校と自治体を訪問しました。来月は高知と大阪と石川、春になれば長野と岡山…

―岡山も「常若」に関わっていましたね。

ええ。(鞆から資料を取り出し)これが昨日富山商業で授業した時の、生徒さんの感想

文です。みなさん文章力ありますよ。

―何名くらい？

40人です。

―1クラス？

はい。2年生は7クラスあって、会計専攻が3組、流通経済が2組。コンピュータが2組。

―今日は、「常若」のコンセプトを初歩的なところから教えてください。どんなビジョンを掲げているのかなど、質問に答えて頂く形で。このプロジェクト「常若」を、どういった経緯や目的で立ち上げられたのか。初めて聞く人にお伝えするような形で教えてください。

「常若産業甲子園」とは

はじめは「地球環境問題」と言っているかも知れませんが。環境問題は、それぞれの経緯があつて起こっているもので、例えば「温暖化問題」はエネルギーの過剰消費の、「海の汚染」は海水の温暖化と生活から出る廃棄物の問題、「山の環境」は木材価格…それぞれ解決の目的が立っていないと思うのですが、90年代の後半から、国を挙げて環境教育をした結果、今の中高生、あるいは小学生には、自然環境のために自分にできることをやっ

常若産業甲子園とは…

宗像国際環境会議（平成26年設立）の一環として令和2年に始まった。同会議は、「海の鎮守の森」構想を掲げ、海の再生事業に取り組みながら、日本の環境の未来について話し合う。大人と子供の絆が滞れば、環境も産業も途切れてしまうという危機感から始まった「常若産業甲子園」プログラムは、ドキュメンタリー映画作成、クラウドファンディング等を通じて、提言・情報の発信を続けている。

てみたいという心が育っていると感じています。環境問題を解決する見通し目途がなぜ立たないかっていうと、「誰かの責任」という特定が難しいからです。

だからこそ一人ひとりの心掛けが大切になってくる。ライフスタイルを変えるのです。環境教育で培ったことをライフスタイルに浸透させることも大切ですし、自分の仕事として取り組めたらもっとすばらしいと思います。環境教育は受けたけど大人になったら実践には至らないってことが起きないため

には、大人になってからの仕事に繋げる方法があると思える中高生が増えてほしい。それが「常若産業甲子園」の願いです。

30年前と比べてフリーランサーだとか、テレワーク、リモートワークが可能になって、職場で働いているか家庭にいるかという二者択一ではなく、稼いでいるか仕事をしているか家庭にいるか、という三つの選択に増えました。生計を立てるために「稼ぎを得る時間」と自分がやるべきこと、やりたいことをやる「仕事をする時間」の両方を追求できる時代になりました。コロナ禍でリモートワークが常態化したので時間の使い方が自由になりました。決まった勤め先で生計を立てる人も、フリーランサーも、家にいながら仕事ができます。問題意識を持っていることを実行する時間、仕事のための時間を稼ぐ時間とは別に持てるようになりました。それを目的として移住する首都圏の勤め人が始めています。運が良ければ「仕事」から稼ぎが得られるという機運を盛り上げていきたいです。「常若産業甲子園」に出演して、自分が一生かけてやりたいことを宣言して、社会人

になってから、ほんとうにそういう取組をする。そうした動きが連綿と続く一つのきっかけになればと思っていました。

— 今、何回目なんですか？

1 回目です。

— 1 回目はいつ？

今年（令和3年）は10月8日でした。

— 場所はどこで？

宗像大社で行われた「第8回宗像国際環境会議」で行われました。

— 併設という形で行われたんですか？

そのプログラムの1つです。

— 最初の、1 回目の呼び掛けはどういう形です？

縁のある方を通じて呼び掛けました。

— どのくらい集まったんですか？

23人、高校の数は10校くらいです。

— 今から年に1回くらいのペースで？

そうですね。まずは10回続けたいと思います。

— 出場に関する条件とかは？

「常若産業宣言」という文書があるので、それを見て、自分はそのような産業に就きたいなどと思うこと。もう一つは、将来やりたい仕事について、自分で動画を撮影して編集でき

ることです。

―仕事の内容を？

はい。今回は持ち時間 2 分でやりました。

―動画のプレゼンみたいな？

はい。

―それを皆さんが持ってきて、それを見て審査？

審査はしていません。全員出場しました。

―子供達だけですか？先生とかは？

農業、林業、芸術、地域おこしの分野で「ザ・常若産業」みたいな先人方がおられて何人か出演していただいています。

―子供達とは別に？

子供達と一緒に出演しています。

―宗像で行われるようになった経緯は？

宗像市では今年で 8 回、国際環境会議をやっているんですが、一昨年、小川知事と静岡の川勝知事が出演された時に、これから大事になる概念は「常若」じゃないか、という提案が川勝知事からあって、それ以来毎年「常若」っていう理念、概念に基づいてプログラムが編成されています。それがきっかけです。昨年 7 回目に「常若産業宣言」を採択したので、それを繋いでいくために今から社会に出る中高生が、社会に出る前の無垢な

状態で、自分の夢・抱負を語ることは、「常若産業宣言」をのびのびと広げていく方法じゃないかと考えました。

環境教育の成果

2003 年から 2005 年の 2 年間、私は経済産業省で地球環境問題を担当する環境経済室長をしていました。初代の室長でした。環境と経済が両立するのはどういう状態か、というのを皆で考えていました。

経済活動に関わる人にも環境意識はある、買う側の環境意識が売る側に影響します。買う側が「環境に悪い物は買わない」という意識になれば、たとえば今、ストローは買わないという人は増えましたよね。そういう意識は随分広がりました。レジ袋の有償化もそうです。その分プラスチックのごみは出ない。環境教育のおかげで。そういう意識を持つ人が増え、生活者としてだけでなく、仕事としても実践を望んでいます。

愛媛県の離島の高校生にインタビューした時に、ひとりの女子生徒さんが「島の道路に使い捨てのマスクが落ちていて、それを拾

うのは嫌だが、海に落ちるのはもっと嫌。だから海に落ちない仕組みを考えて実現させたいと。」彼女はそうしたことあつてでしょう、慶應大学藤沢キャンパスに進学が決まりました。

彼女の取組みは立派な仕事です。稼げるかどうかはともかく。仕事っていうものが、ボランティアにとどまるのも良いですし、創意工夫してビジネスになるのも良いと思います。稼ぎを前提に考えてしまうとビジネスにならないものは出来ないとなってしまうます（笑）。

―そうですね。

若い人はそういう考えから脱け出すことを望んでいると感じます。私たちの時代だったら歌手になりたい、俳優になりたい、と稼げるまで何年も頑張る人がいましたよね。今の高校生は社会課題の解決について、その感覚を持っていると感じます。東京のスタートアップの人たちに同じものを感じます。

―そういう実感がありますか？

はい。我々の時代は労働と余暇。働いているか働いていないか。今は稼ぎと仕事の二つの軸で自分が生きていきたいと願っている

のではないのでしょうか。

―働くか休むかではないと。

お金を稼いでいる時間と仕事をしている時間と両方で社会生活をしている。趣味というよりも社会に貢献する仕事だと思って頑張っている。離島のマスクを回収したいと本気で考えているんですから。

―マスクを仕事の中に取り込むっていう発想はなかなか…

ねえ(笑)。

―今までの発想になかった。

社会貢献という言葉にはタダでもやるようなニュアンスになりますが、続けることを考えたら黒字にした方が良い。事業性ですね(笑)。

―それは川上の、って言われていた…?

はい。「川上のマーケティング」と連動するんです。三年前に、ベンチャー企業の将来有望な百人のプロフィール、「Jスタートアップ」を見た時に、社会課題の解決のために起業している人が、自然環境、福祉、教育にたくさん挑んでおられること気づきました。日本社会の「含み資産」と勝手に呼んでいますが。教育の中にも福祉と絡んだ教育も結構あ

ると思うんですが、障害者だったりシングルマザーのお子さんだったり、子ども食堂もあるでしょう。福祉を手掛けたと思う方は私の想像より多かったです。

そのビジネスに成長性があるとしても市場企業になると言うほどではないかもしれませんが。でもそういう仕事を黒字の事業としてやっていこう、自立してやっていこうという、いわば「社会に必要なことだから私がやる」って言う経営者がたくさんいることに気がつきました。高学歴の皆さんなら、良い暮らしをする、年収の高い仕事に携わるという選択があるでしょうに、社会課題のために新事業を起こす、独立した道を選ぶ。だとすれば、全国の高校生に広い裾野が広がっているのではないかと思っただけです。それで各地の高校の訪問を始めました。優秀で、意志が強く、リーダーシップがあって、そんな人だけの話ではないと思うんです(笑)。私は、この現象は日本の世相が生んだ賜物ではないかと思うんです。

―世相？

社会課題というものは、まずは行政に任せ

て住民が意見を述べるといいうやり方が今の世相ではないのでしょうか。そんなやり方だけでは解決できない数多の問題はどうするんだと。それなら自分たちでやるという気概を子供達が持っている。

―それは行政に対する不信感？

不信というよりも解決しそうな気がしないという感覚ではないでしょうか。行政にもシングルマザーの問題を解決することはある程度できるかもしれないけれど、できないこともある。大人は稼ぎと暮らして手一杯だから社会のことまでやる時間はないと諦めるかもしれない。子どもたちは稼ぎ方を工夫すれば自分のやりたい仕事も同時にできると考えている。

―大人には余裕が無いわけですね。

自分の30代、40代を振り返ってもそんな時間があると思っただけです(笑)。

―一番働き盛りの時(笑)。

働いているか、家庭サービスをしているか。確かに二分法でしたね。

勤務時間が長かったから。その時間の隙間に何か社会活動を考える余裕はあると思っ

ていませんでした。フリーランサーになると

労働時間を自分で決められる。俳優や歌手のような方もそうかもしれませんが、稽古と本番の残りの時間があります。これからの社会人は仕事と稼ぎと家庭の3つで成り立っていくという気がしています。

—お勤めの職場の若い人たちと接して気付いたんですか？

いえ。社会起業家と言われる人たちを見ていて最初に気づいたんです。これと同じことが離島半島農山漁村の子供たちにあるのは、と思って訪問したら、環境や福祉に志を持つ生徒さんがやはりいらっしやる。両方のエネルギーがつながったら日本が変わり始めると思っています。

—それと川上の発想とはどういうふうに繋がりますか？

社会課題の解決を目指す起業家にインタビューすると、アイデアが新鮮に感じます。バングラデシュは所得が低いですがそれゆえに今や繊維製品では世界の工場になっている、日本も通って来た道です。

繊維産業に従事しただけで豊かになるわけではない。もっと付加価値の高いものを作ってもらって、消費者に喜んでもらえる方法

はないか。そう思って現地に住み込んで新事業を始める。その動機は安く作って稼ぐという動機ではありません。そうした動機を形にするためにどうすれば良いのかを考えて実行するのが川上のマーケティングです。その動機を変えないで日本内外の消費者が買いたくなるものを生み出す。作る側と使う側の双方からトンネルを掘り始めて開通させるのが川上のマーケティングです。

—で、繋がる？

利益目的じゃない。バングラデシュの方々の生活を良くするという軸をぶらさないで、顧客が喜ぶ製品をどうやって作るのか。そのトンネルはお客さんの気持ちを聞いて聞いて、試作して試作してやがて貫通する。黒字にすれば事業として成り立ちます。これが私の考える川上のマーケティングです。今の教科書では主要単元になっていませんがこれからだいじになると思っています。

—顧客創造とは違う？

まさに顧客創造です。顧客創造の方法論は教科書では製品がすでに存在する事例が多く販売戦略が中心です。サービスや製品をゼロからデザインすることと連動させなければ

ばなりません。

—それはそうです。マーケティングの…

自分の強みを生かす、いわゆる競争戦略にはいくつかのモデルがあります。川上のマーケティングはそうしたモデルに当てはめて論理的に答えを導くという作業ではないと思っています。高校生の間に、いつか自分は川上のマーケティングができるかもしれない、いつかやってみたいという期待を抱く教育までなら、高校の教室で十分できると思います。

—中高生にターゲットを絞られたのは？

大学は学部ごとの専門教育ですし学問にはそれぞれの理論と形式があります。方法論が確立していないものは実務であり経験と扱われやすいかもしれません。高校であれば専攻に関係なく誰もが受講できると思ったんです。

—社会科学的な教え方はあるかも知れませんか？

社会科学とは少し違う気がします。サイエンスティックなものじゃない。本人がやりたいと思うという主観から出発するのです。学問にはアートとサイエンスの両面があり

ます。人文は科学ではないでしょう。主観を扱います。「人文科学」という具合に後ろに「科学」を付けてしまうと、たとえば歴史でも、証拠が無い歴史学としては認めないという議論になり、証拠がないかぎり歴史学の発達が遅れてしまいますよね(笑)。

—私の感覚では、そもそも「目指している」という意味で人文科学かな、と。

「なんでも科学で出来る」というのは思い込みではないでしょうか。ベートーヴェンの音楽とシューベルトの音楽とどちらが美しいかは科学ではわかりません。そういうことが人文とか再現性のない社会科学の分野にはたくさんあって、川上のマーケティングはその一つではないかと思えます。

—経済でも正直、どうか、というところがありますよね？それが金融工学で数学的になつた感じがして…

マルクス経済学はサイエンスかどうか分かりませんが学ぶ価値のあるものです。

—数値化できる…。

数値化できないから学問じゃないと言いきれないと思いませんか。特別活動や音楽、美術、書道とかはサイエンスではない。国語

にも古文や小説、随筆をはじめ科学と関係ないものがあります。マーケティングにはサイエンティフィックな部分もありますがそうでないものがあります。

—高校の場合は、普通科を意識して何かを構想していますか？

「普通科」「総合学科」「商業科目」三つのカリキュラムを並べたとします。昨日、富山商業高校の先生と話して、商業科のカリキュラムだったら常若産業的なことをテーマに川上のマーケティングを扱う時間が十分あるとわかりました。マーケティングも川上、川下を両方扱う時間がとれます。普通科や総合学科の商業コースとなれば、時間数が限られる分実践経験を積む時間を総合的な探究の時間などで工夫できたらと思います。

総合学科だと『産業社会と人間』が1年生で35時間ありますから、その3分の1、12時間くらい。総合的な探究の時間が3年間トータルで105時間あるから、+商業コースの2年生のマーケティングである程度のことではできる。

普通高校の場合は、高校3年生の総合的な探究の時間をそれをやったところで、皆さ

ん進路決定をされているので、後手の感がある。やるんだったら1年生の春はどうでしょうか。中学を卒業して真新しい制服を着て校門を入った瞬間、卒業後はばたく社会との繋がり、地球・自然との繋がりとかが、仕事と稼ぎとか暮らしとか、そういうことをベースラインで入れるってというのはどうでしょうか。実践経験の時間はないかもしれませんが。総合的な探究と言っても理科や社会の科学的な探究をしたいという面がでてくるでしょうから。

—いろいろ選択は出来るでしょうね。

選択できるといいですね。哲学、音楽や美術だって探求に値します。医学部や理工系のカラーの強い人だったらそのように時間を使えばいいでしょう。農業高校も先ほど申し上げたことができる気がします。工業高校はちよつとジャンルが違う感じが今はしています…。

SDGs

—SDGsとの絡みはいろいろな学校が取り組んでいるんですが。

高校を訪問して総合的な探究の発表を見

ると他人事として書いている物が多いと感じます。客観的に学術的に、自分の好き嫌いとか良い悪いとかを切り離して他人事として書いています。我が事として探求すれば、自分の将来に関わる捉え方になるでしょう。

離島に行つて、その名前が例えばヤマウチ島だとした時に、校長設定科目のヤマウチ学の研究課題発表は、島の面積が何^{km}、人口が何人、いつ町から市に変わり大人の仕事は1次が何人何百万円、2次が何人何百万円と判で押したように書いてあつて我が事にひきつけないまま他人事で終わる。それはそれで意味があるとは思ふんです。俯瞰的なものの方という意味で、けれどそれを我が事として自分の仕事として考えることにならなければ、アクションにはつながらず、学習止まりになる。

総合的な探究の狙いが、「客観的、論理的、俯瞰的なことを作るSDGs」と、「自分のやりたいSDGs」で、探してみたらこれでした、ウミガメの卵でした、みたいなこととはちょっと毛色が違う。SDGsだから良いってことにはならない。今日私が申し上げているこ

ととの関連性から言うと、我が事として関連しているかどうかということ。

―現場では、教員が一応指導しなければならぬという建前がある。SDGsに載っている17の世界的目標を基に子供達が持つてきても、指導する教員側が分からない。だからこちら側がある程度知つている範囲で進める。例えば「環境」と言つたら比較的…

なじみがある。

―なじみがあるけれど、出てくること全てに対応できるわけではなく、教員の教科の特性もあると思う。国連が要求している全部を、現場が対応できない。1人1人が全部に対応するとパンクしてしまふ。

その問題がありますよね。それはとりわけ小規模校に行くと強く感じます。川上のマーケティングつてなると、ここに生徒が1クラス28人いたとしたら、全員が違うことを考えて当たり前になるでしょ。先生の応対時間が1人1時間やれば28時間でこなしきれない。それは大規模校でも同じだけれど、小規模の先生の校務のウエイトは大規模校より高い。

―高いですね。

何らかのヒューマンリソースの補充をしないと。別にこれは川上のマーケティングだ

けの問題では無くて、総合的な探究をやるのが、『産業社会と人間』をやるのが、キャリアデザイン的なものをやれば、全員問題意識は違うわけだから。

―1対1対応は無理。

でも1対1対応をしなければ教えている意味が無いという要素もある。

―すると個別最適化と言ふことと繋がつてくると思ふんですよ、パソコンを使つて…。

というか、やはりもっと教員以外の人が参加するつてことだと思ふ。その部分的解答が公営塾だと思ふんですけれど。

―外部人材とどうコンタクトを取るかっていう。

大崎上島で『高校魅力化 島の仕事図鑑』（冒頭で紹介）という、島の人はどんな仕事をしているかを作成し学ぶ作業を通じて、島の中高生が触発されている。このアプローチはベースラインとして大事だと思ふ。

でも世の中がこれだけデジタル化、リモート化している時に島の仕事だけを見るつていうことでもない。離島は世界と繋がつていて、子供は現にユーチューブで東京でもアメリカでも観ることが出来る。外部の様々な人

たちと島の中高生が結びつく、っていうことを学校が緩やかに管理するのはどうですか。先生の許可がないと外と接触してはいけない、じゃなくて。

ひとりの先生が全部面倒を見るのは難しいでしょう。社会人には就労相談と言う行政サービスがある。誰かが専属的にやることになっていないでしょう。中高生だって同じで良いのではないですか(笑)。

自分自身をマーケティング

―話が飛躍するようですが、1人1人のニーズというか、自分事として捉えていくものを職業化していくことになる、今までのメンバーシップ型の企業形態が、今、ジョブ型に変わって言われているじゃないですか。

言われていますね。

―ジョブ型をイメージされているんですか？それとも全然違うんですか？

ジョブかメンバーシップかという次元で考えているわけではないんです。ジョブには、人から与えられたというニュアンスがある。「この仕事をやってくれ」と。やりました、10万円、これがジョブ。大工さんとか。これは稼ぎの範疇です。仕事ってというのは自

分でデザインする。やりたいことをやる。

―するとメンバーシップじゃなくても良いわけですね。

メンバーシップでも良いし、アドホックメンバーでも良いと思います。

―雇用形態の問題じゃないんですね。

自分がやりたいこと、叶えたいことのために人に働きかけて一緒にやろうとするといった一連の活動です。メンバーシップだってジョブだっていいんですけれど、生計を立てることと折り合いをつけなくてはいけなから、折り合いを付けようとする時にメンバーシップに意味があることも多いでしょう。イメージが少し分かりました。ジョブ型に移行する流れの中で考えられたと思っていました。そうじゃなかったんですね。

そうじゃないんです。

―環境問題から始まったんですね？

私の場合は地球環境ですが、高校生と会っていて、一番強く感じるエネルギーは福祉の問題意識の強さです。知らなかったんですけど、日本人のうち障害者は10%以上というものがあるそうですね。離婚率が高いことからするとシングルマザーは百万人よりも多いかも知れない。親兄弟おじいちゃ

んおばあちゃんが糖尿病だったり、

―認知症だったり。

認知症だったり。何らかの障害を抱えている。子供だってそういうことがありますよね。これも日本の教育の成果だと思っんです。障害のノーマライゼーションという政府の政策がありますよね。その効果として、子供達が福祉の問題に対して我が事意識を持っている気がする。たとえば足が不具合の子供がいた時に、「大丈夫？」って肩を添えに行くような気質を持っている。

―抵抗なくそういうことが自然に出来る。

自然に出来る。私が「将来何をしたいの？」って聞くと「お年寄りの世話をしたい」「困っている人のために働きたいです」とか答える。昨日も何人かいたんですよ。100歳で日本一になった高校生がいて、垂れ幕が下がっていて、「スゴイ子がいるんだな」って思っていたら、私の目の前に座っていて、聞いたら「自分は大人になったら高齢者の世話をする仕事をしたい」って言うんです。昔だったら公務員とか農協とか、それこそメンバーシップ、公務員が考えるような問題を、生の課題として仕事として捉えている。じゃあ高

年齢は何してるのって聞くと、「いや、それがわかんないんです」って答える(笑)。そこには彼なりの川上のマーケティングがあるということでしょう。

自分と切り離された物やサービスが売れるための技術がマーケティングだと捉える必要はない。自分の将来をマーケティングするっていうのもある。

—自分をマーケティンの当事者とする。

自分の将来という客体をマーケティングする。

不安な個人、立ちすくむ国家

—この本面白くて。今の経産省の若い人は、これ読んでいると、昔の公務員に対する意識と全然違う。安定職というイメージだったのが、どうやったら皆さんの声が聞こえて、それに応えられるのかを真剣に考えている若い人の話がいっぱい載っていて。

一つはインターネット。個人が情報を取りやすくなったでしょう。タダですよ。それまでは雑誌一冊買うっていうといくらか払っていました。加えて、無料で発信ができる。ブログとか、SNSとか。個人が情報をふんだ

んに生み出したり吸収したりっていうのが一つ。

二つ目は、就職氷河期が4年ぐらいあったでしょ。あの時にメンバーシップに頼らない新しい日本人が生まれたと思うんです。メンバーシップは俺をいらぬという。その人たちの苦い思い、苦い思いの上の覚悟、それが新しい歴史として伝承されていく、と考えています。

そういう世代が百万人以上おられて、その兄弟姉妹とか後輩がいます。メンバーシップに頼ろうと思ったけれど生き方を変えざるを得なかったという新しい日本人。ジョブがあればよいつてことじゃない。第一期「仕事・稼ぎ・暮らし」世代が20年前に生まれたんじゃないかと思っています。2000年マイナス22だから、1978年ないし82年生まれくらいの世代です。それ以降の日本人は社会意識が高いのではないかと。メディアの人や政治家はこうしたこと気にくなくチャンスが多いでしょうが、霞が関はそういう人たちと接点は薄いでしょう。だから永田町の人と会話した時に、「何を言ってるのかりアリティを感じ

にくい」。ニートとか引きこもりとかいう社会問題としては知っていても、自立した個人不安だから頑張る、そういう人たちが何を考えているのかもっと知らないか、という問題意識からは間違ってるじゃないか、という問題意識から生まれたものだと思います。

—話を聞いてみたい問いかけがたくさんあります。非常に認識が高いと思いました。

ある意味、初めて個人の不安に着目した本格的な取組みです。

—ファクトが並べられているという印象が強くあつた本なんです。

そうしたんです、でもファクトでは説明しきれないことがあります。たとえば高校生が福祉の仕事をしたいと感じるのは感覚的な問題。アンケートとって、データを求めては何%だから、という話ではないです。私に福祉と語ってくれた高校生が政府の調査で「福祉」と回答する保証はないでしょう。一人一人の感覚や思いが出発点だと思います。

—エビデンス至上主義になると、そこに引かかる人がいる。

エビデンスが正しいっていう保証も無い。エビデンスが無いから間違っているという

保証も無い。

武者修行

―将来像的に、岸本さんが描かれている、高校生がどういふふうな形で社会を作っていったらいいのかを教えてください。

これまで申し上げたことにつけ加えるなら、外の社会、知らない人との出会いから生まれる「武者修行」です。

―武者修行？

私は高校出て東京の大学に通って通商産業省に入っていました。28歳でニューヨークに2年留学しました。18歳から30歳までの12年間はずっと武者修行だったと思います。

―もともとどちらのご出身？

神戸です。18から30までの12年間は稼いでいましたけど大して仕事してませんでした(笑)。40年公務員を振り返ると12年間の土台があったのは良かったと思います。

―具体的にどういう武者修行？

大学は大学ですから明るいキャンパスで。通産省は門前の小僧みたいな感じですね。

―当時、大臣はどなたでしたか？

最初は村田敬次郎さん、田村元大臣、三塚

博大臣、渡部恒三大臣です。

アメリカ留学では初めて学問に触れたって感じでした。大学は法学部でしたから。

―海外はどちらに？

コロンビア大学。そこで国際政治学、貿易、統計学、経済学、アメリカの経済戦略、それに会計や金融、ビジネスの基礎ですよね。実学も多かったけれど、本当に学問的なアプローチを教える先生がいたから、「ああ、これが本当の学問なのかあって。」事例があって、理論があって方法論があって、物理とか数学とかみなそうでしょう。

外国人とコミュニケーションするのってこんなに大変なのかとか。ボディランゲージとか全然違いますもんね、オーバーアクションでハグしたり(笑)。

―まさしく武者修行ですね(笑)。

今だったら海外に行って武者修行する方法もあるし、日本にいなから海外の人と交流できたり、東京に行かなくても東京の人と交流したり。

右も左も分からないって経験は良かったです。そういうことって一生続くじゃないですか。親元を離れて右も左も分からない所で

何年か過ごせたことに感謝しています。

―そういう武者修行的なことが必要？

この間、名の知れたイタリアンのシェフに今日のテーマを話したんです。「くれぐれも料理の専門学校に行かないで欲しい。私の所に来たら3年できちんと育てる自信がありますよ。」とおっしゃいました。専門学校に2、3年行ってから来るとかえって教えるににくいとも。

その方流に言うると、武者修行で俺の所に来い。俺のやり方を気にかどうかはあるけど俺のやり方をキチンと教える。

警察官なんかも、大学に行ってから警察官になる方法と、高校出てから警察官になる方法があるけれど、どちらが良いかは一概には言えない。

―昔でいう徒弟制度？

徒弟制度って考えてもいいけれど、右も左も分からない場所でやるっていう…

―手探り？

高校出てすぐそういう経験をした方が良いかどうかは分からない、大学出てからの方が良いとも限らない。

―高校9月入学の話があった時に、半年間を

そういう期間として設けるっていうのも一案ですよ。

一案ですよ。

最近の教育の中でみんなが真剣に学んでいることの中で、試験の合格自体というのが案外多くないですか（笑）。医師の国家試験、司法試験、公務員試験、各種の資格試験、大学の入学試験、何とかの一級……。試験を合格するための勉強は必要だからやればよいと思いますが、試験が無い勉強は、いつどのようにやれば良いのか。学び方の教育も大切だと思います。

たとえば紫式部を学ぶのは？ローマ時代を学ぶのは？それは勉強したい時にすればよい。年齢では無いんですよ。資格試験は早く資格をとって奉職する、っていうのは分かってますから動機も明確ですけれど。

「ゴールが分かりやすいですよ。」

教員試験もそうですよね。資格を取ってメンバースhipに就くというために勉強してその分野でデビューする。一連の仕事としてよく分かるんですけど。学びたいことを楽しく学ぶという術を身につけることも大切でしょう。30代とか60代とか80代とかでも

構いませんよね（笑）。

「それぞれの年齢、ニーズに応じてっていうことですよ。」

はい。徒然草の良さって20代の前半で分かるうとしても…、

「無理ですよ。」

50代、60代になって、「良いこと書いてあるなあ」ってわかる気がします。

「それは中学の時に暗唱させられて、それが50、60で分かってくる。」

そうそう。タイムカプセルに入って。

「よく分からないままにするっていうのもいるわけですよ。」

それは良いと思うんです。世界史日本史もそういうことであるじゃないですか。そういえば壇ノ浦って習ったよなとか。

「それが年齢で分かる。」

初めて世の中に出て右も左も分からない中で、そこそこに自分で考えていく。大学入試っていうのもそういうもので良いのかなと。

「それぞれのニーズに応えられるようにする条件として、まずは中学校や高校に色々と自分たちで自分事として考えられるという教育がある程度位置づけられるようにしていったら、そういう年齢になった時に、そういうえばあ

の時の…

そうそうタイムカプセルに入ってる（笑）。
お誘いをいただいて、6月から日本デザインコンサルタント協会に入会させていた
だき、デザインコンサルタントになったん
です（笑）。

実は、小学校の時にデザイナーになりたかったんです。そのことを思い出して、とても
びっくりして、「あ、なってる！」って。
「そうなるから気付かれたんですか？」

はい。「うちの協会入りなさいよ」「私デ
ザインやっていません」「いや、いいんじゃないの」って感じで（笑）。中小企業庁や九
州経済産業局の職歴とか、ものづくり生命文
明機構の活動歴を評価してくださいました。
「繋がったんですね。今の子供達がこれから
の教育の中でこういうことを経験してもら
うと、先々に繋がる。」

ひょっとしたらそういうことあるかも
って思うことはとても良い。俺ってひょ
っとしたらシェフの才能あるかもな、と
か。俺野球うまくないけど、野球解説者は
できるかも、とか。ふと、できるかもって
いうのをいくつか持っていたら楽しい。

―先程の「常若産業甲子園」の話ですが、普通科の高校でイメージして、いろんな学校が考えたいつてなった時に、どういふふうにしてカリキュラムの中に入れていつたらいいのとか、どういふふうな形でプログラムを組んでいつたらいいのとかいふアイデアとかご提案がありますか？

私自身は学校に勤めたことは無いので具体的に根拠をもってこうしたらよいというのはありませんが、キャリアデザインは自分で進路を作り出すっていうのを促している学校は結構あると思います。偏差値の高い大学というものさしではなく、もっと「多様に」という時の多様さの程度を、1年生の時に思いつきり広げた方が良くと思う。

『産業社会と人間』の教科書を読んだんですけれど、職業電話帳のように感じます。仕事の電話帳では無い。ジョブリスト、労働者がほとんどです。自営や企業経営者は自分で切り開く仕事。どういふ価値に奉仕をするか、っていう仕事も大切に位置付けられるといふと思います。

―「仕事とは何ぞや」といふ哲学ですね。

ええ。他人を笑わせたいとか、泣いてる人を慰めたいとか、地球を綺麗にしたいとかが

あって、その各論として「だから植木屋さんになろう」とか「ピアニストになろう」となるので、いきなりピアニストになるっていう考え方に限らない方が良く。

―我々の立場からするとそれが一番の本質。先生がそれを受け止めるのではなくて、誰かに受け止めさせて、先生が間さばいた方が良く。

―先生がハブ的に繋いでいく？

ハブと言うか、生徒と誰か大人との間で、この子に対して何らかのガイダンスをしてあげる、伴走してあげる。

―伴走：

受け止めて、先生が解答しようとするのが良いとは限らないと思うんです。

―無理ですよ現実的に。先生は専門家じゃないから。

1年生で『産業社会と人間』をやる時に、キャッチャーがボールを受ける人を何人か作って、この人と子供の間に先生が入って、三角形を作るのがいんじゃないか。それは「総合的な探究」でも同じ。

高校再編

―文科省が普通科の再編を取り組み始めたんですよね。全国の7割の普通科を、国際社会的なことに通用するとか、地域のニーズという形で学校を立て直していくとか。田舎の過疎化が進んだり少子化が進んだり、場合によっては学校そのものの存続が危ういところも含めての地域の問題課題をいかに解決するか、っていうことで、普通科の位置付けを文科省は考えている。

私の意見は2つあって、1つは地域の課題を解決するのは高校生ではなく、大人が解決する。けれど高校生は大人の予備軍だから、解決に参加した方がよい。そうすると必要な改革は、そういう高校がリカレントと2階建てになっていて、予備軍の高校生と主役の大人が同じ教室でやり取りする。

もう1つは、地域の課題が何かは地域が言葉に紡ぐ努力をするべきで、大人の代わりに高校生に考えさせるべきじゃない。限界集落到に住んでいる50歳以下の人は、限界集落の50歳以上の人が親族がほとんど。そうすると自分の家の課題をよく知っているけれど、それを解決したいというよりは、「仕方ねえじゃん、俺には出来ないよこれ以上」という埋もれている未解決の不安とか不満と

かがいっぱいある。その答を高校生に考えさせるというのはおかしい。まずは当事者が問題を言葉にしてみることを恥ずかしがらないでできるようにしたい。それを高校生が手伝えることはとても良いことだと思います。たとえば、買い物に行くときに車が無い、免許返上しているお年寄りがいっぱいいる、つていうのを子供達

が発掘するのは良い。でも答を書かせるのは私は不満ですね。ビジネスってそんなに簡単なものじゃない。

―考えるきっかけを作るという意味では…
良いと思います。でも子供が何時間かかけたから課題の解決策が分かるなんてもんじゃない。しかも問題を俯瞰的に捉えてしまうと個別の事象の解決策が見えにくくなります。

―マクロ的が一番書きやすいからですね。
書きやすいかもしれませんが問題は区々に違いますよね。

―ミクロが積み重なっていったって、積分的にマクロって発想はあると思う。

そのためには地域の大人と、大人予備軍としての高校生が共に経験してタメで意見を

交わすことが大切になると思います。

―車座になって。
そういうのがいいと思います。お前らは一人前だと扱う。産地の新商品を高校生が開発するのを見ると、高校生が知恵袋だ、起業家だのように扱うのは可哀想に感じることがあります。一緒にやれないのかしらと(笑)。

―北九州市立大学に地域創生という学部があつて、地域活性化のために実験させている。
小倉の旦過市場の再生を図るために、学生が考えた「大学井」という「井ぶり」がある。市場の天ぷら屋から天ぷらを買ってきて、ご飯も盛ってもらって、食べる。そのためのスペースも作っている。大学としては実験的にさせている。地元の方にまあ学生さんだからと受け入れてもらっている。行く行く自分が起業するきっかけ作りになるという点は面白いと思うんです。

高校生は教室にいて、PCか鉛筆持つてノートに向かっているから、現場体験をさせる、させる以上何かアウトプットを作った方がいいから、解決策出してごらんとする。けれどさっき言ったように0が1にすぐになるわけではない。自分の経験を越えたものと一緒に合わせて世界を広げていくように場を設定するか、それとも高校生だけで閉じた世

界でやるか。

富山商業の授業では「岸本さんの教えてくれた0から1のマーケティングはとても大変だつて分かったので、自分は勤め人になろうと思いましたが」と5人くらいがはつきり書いている(笑)。全く問題ないでしょ？ そうしたことに身を染めるかどうか自体が選択なんですから。

―問題ないです(笑)。ある意味、とても真面目ですよ。

いいでしょう(笑)。

―岸本さんご自身はいろいろ限界集落を回られて実際どうなんですか？子供達は地域の課題をミクロ的に感じている、何とかしたいという思いとか。

離島に行くとはっきり感じますね。農山漁村の中高生はローカル線の単線で朝早くから通学していたり、部活もあったり。自分の身近なところは見えても集落全体がこうだとかいうのは人によるんじゃないでしょうか。離島の人は見えている気がする。大人と話す機会が多いのでしょうか。

―増田レポートは衝撃でした。自分は今筑豊に住んでいるんですが、あの中に出てくる町がもうすぐ無くなるのかと衝撃でした。もと

は北九州生まれなんですけど。現実増田レポ
ートにあげられているいくつかの町がそのよ
うになつてきているから。実際どこからどう手
を付けていいか分からない。

イタリアと日本って大体37万km²くらい
で、人口は日本が倍。日本の人口がイタリア
並みに600万になるとどうなるか。広々とし
ていきますよね。

人口が減ること自体は自治体の財政とし
てはともキツイけれど、町として適正な人
口って言った時に、実は4000人でも構わない
っていうのと、やはり1万じゃないと困る
っていう、財政という尺度を抜き去って考え
ることもできる。

—実は、この町←が一つの理想形なんです。

これ、北海道でしたかね。

—はい。この東川町のような行政の持つて行
き方が出来たらなあ、って。

これすごいですよね。

—本当に驚きました。かたや長野県の下條村
っていう出生率が2.0を超えたっていう村はま
た下がっているそうなんです。一時期4000人
を回復したけどまた下がっている。最近分かつ
たんですけれど、その時に入ってきた世代の
方々が、子供たちを産んだら高校に行かそう
にも村に高校が無いから、外に出ていった。せ

つかく回復したのに出ていった。

—県立高校は人数が少なくなってもあった
方が良く強く感じています。

—一戸建て住宅が欲しい世代になってきて、マ
ンションみたいな形で行政がしていたインフラ
整備が、空き部屋が増えてしまい、裏目に出
てしまっているのを見ると、ただ行政がインフラ
だけやっていたらそれで済むって問題じゃない
。高校までは自宅から無理なく通学できる

—ほうがいい。採算が悪い高校を閉鎖するとい
う考えもわかりますがそれなら自衛隊すら
いない島は無人数になつてしまいます。漁業
だけで生計を立てる時代ではないのですか
ら。小学校から高校まで12年間学ぶ学校イ
ンフラがあつた方が良くと思います。

—経済効率で全部考えたらおかしい。

—そこに集落がある以上は。明治時代は必死
で全国に学校を作つた。これだけ豊かな日本
でなぜ逆のことになるのか。限界集落を回る
と、「農林水産業しかないじゃないか、ここ
には。」と言わざるを得ない所がある。そこ
に誘致された工場があつたりすると…
—企業城下町的な？岡山の山の中にバイオマ
スの工場がある、みたいな感じですか？
—住民所得がグッと上がる。でも勤めていな

い人は関係ない。関係ない人の生活問題はや
はり郷土愛と社会貢献とし仕事という意識
が欠かせないと思います。工場が一つあると
せつかくここに来たんだから、これもつと応
援しようよつていうふうには複眼的になる。住
民の暮らしを成り立たせている集落を顧客
とする生業的なビジネスが欠かせません。複
眼的な産業政策が問われると思いますし、人
材を養成する県立高校の役割は死活的に重
要だと思ひ始めています。

—それは常若産業とつながってきますか？

—繋がってきます。たとえばいうなら、筑豊
で出来たお米が魚沼並みの値段で取引され
て何が悪いんだというような政策。福岡は美
味しいブドウやイチゴがありますよね。農林
水産業と常若産業は相性がいいと思います。

—里山資本主義 みたいなイメージ？

—資本主義ではないかもしれません。資本主
義は企業と資本が前提ですよ。農協や漁協
でもいいですし、サービスマンならさほど資
本がない会社でもできるでしょう。

—今、JAとかが改革をやっているじゃないで
すか。ああいうのも良いわけですね。

—そう思いますね。元々組合つていうのは個

人がメンバーシップで頑張るっていう。資本主義とは違いますよね。

―資本主義はどうしても最終的にはグローバル化していく要素がある。

国籍が関係ない株主に従属するわけですから。

―今度、総理大臣が言われた「新しい資本主義」というのは…

30年位前に伊丹敬之先生が人本（じんぽん）主義を唱えて、日本の資本主義は株主が強いのではなくて社員が強い。そうしたことに加えて、今申し上げたような観点が加わるのが、離島半島、農山漁村の観点からは大切だと感じます。

―家族経営的な感じの要素があるから。

はい。そういう要素は今、特に若い人に問われているでしょうね。

―社員株主制度があるから？

自分の上司とか社長さんがみんな株主だとして自分がその一員に加わって40年生きることは自信がない。だから辞めていく。人本主義はむしろ日本の神仏の教えと近いと思っています。

―京都市派の話にもなりますが、やはり近代主義の考え方に今はもう限界が来ていて、放

置しておくのと二極化が広がる一方…。この格差の解消には、豊かな中間層をいかに作るかが大きなテーマだと思うんです。もちろん共産主義とは別ですよ。

機械化っていうもので今までできなかったことができるようになった時代は、大企業の時代でした。機械工業と金属工業の時代です。それと関係ない農林水産業は見通しが暗い。これからのインターネット時代は案外逆だと思えます。エネルギーを使わない人だっているんです。情報を発信するのは、人工知能あるいは人間でしょ？人口知能は大企業の方がいいかも知れないけれど、人間は個人だから、グローバル企業の重役さんと私たち二人はダメですよ（笑）。

―ダメです、確かに（笑）。

大企業は大企業の情報にはクレジットがあります。ソニーから出す情報は良い情報ですが内部の手続きがあります。一日ではできませんよ。私達なら出来上がれば10分くらいで出しちゃいます。受け手から見てもどっちがいいかそうはつきりしない時代になりました。

―そういう発想は初めて聞きました。

ソニーが出すラジオを私達2人が作ることはできない、機械の世界はそういう世界です。情報はそうじゃない。だから大企業は受け手に刺さる発信に苦労する。会社の名に於いてになると大変。

―確かに…

農林水産業の世界は、個人のビジネスにはそういう不自由はありませんよ。年収は高くない、幸福度が高い可能性があると思いませんか。

―小泉さんの息子さんが一時期、儲かる農業って言っていましたね。食べられなかった農家のイメージを、農業生産に従事する意味で呼び掛けたのは良かったと感じていたんですが、どう思われますか？

コメと麦、林業全体、沿岸漁業はなかなか厳しい状況にあります。簡単には儲からない。イチゴとかトマトとか、コメ麦以外を作ると儲かる可能性がある、でもそれが農業をしている人のテイストに合うとは限らない。求められるものを作っているという自負も大切でしょう。

―農業はどうしても束縛があるじゃないですか、太陽と土と水っていう。

そうですね。

―簡単に情報の流れや資本主義の流れに乗りにくい部分があるから、逆に弊害も生むんでしようけれど、その大事さも考えさせられる。教育も、どんなに時代が加速していても子供自体はやはり子供としてあるっていうことは、こちらがどんなに急かしても、やはり動かせないものはある。そういう流れの中で「常若」という発想を大事にされている話に共感を持ちました。

昨日の富山商業で、ある女子が健康食品らしきワードを並べたんです。尋ねてみたら、「昼と夜の間食べる間食」だと。「菓子屋をしたい」って言ってるようなんですが添加物がなくて糖尿病にも配慮した、誰もが安心して

て食べられる間食を作りたい。砂糖を使うかどうか迷っているのかもしれない。「あ、これは流行る仕事だ」と思いました。中国では怖くてスーパーで食品を買えないって話がある。日本だって同じような心配を持つ人は結構います。日本は、見栄えや日持ちを要求するから、農家の人は望んでいなくても稼ぐために仕方無く付き合ってきた。それがもし変わり始めたなら、地元の産物を安心して食べるため農業に活路が出てくる。

三重県に南伊勢町ってところがある。なりわいがないからキャベツを思いついた。1ヶ月前来た、それを言ったら、地元のスーパーが全部引き取る、全支店でキャベツを並べる。今度は10ヶにする、スーパーだから店舗への物流だけでなく、引き取りに行く逆物流をもっているからできたんだそうです。

―安心して生産が出来ますね。

ええ。今は青森県のスーパーに長崎の大根があったり、愛媛に青森のイカがあったりしますが、カロリーベースではなくて、点数ベースで食糧自給率を所在別に計算していくといいと思う。気がつくことが多い気がします。

―それぞれに伝統があつて、そこで培ってきたものがベースになるはずなんですよね。そうそう。

―最後に聞きたいことがあります。今までの話は国内の話として聞いてきたわけですが、かたや周辺諸国が情け容赦無く色んな仕掛けをしてくるじゃないですか。目の前で地道にやっている時に、外から潰される危険な状況が常にあつて、海外と国内とのバランスが難しい働いていたら横に突然外国人が入ってきて田んぼを耕し始めた、というような諸要素が複雑に絡んでくる。今の国際社会がどんどん加

速する中で、考えられている「常若産業」を、どういう兼ね合いで子供達はやっていかなければいけないのか。ただ自分の突き進む道をひたすらやっていけばよいのか。

問題を2つに分けて考えると、資本のグローバル化は、お金の力です。基本的には強いもの勝ち。そこに経済安全保障の問題が出てきます。外資規制をかけるとか、外国人は日本の土地を買えないようにするとか、どの国でもある程度はやっている。

一方で企業には勤めないで週2日3日程度フリーランサー的に働く。それで生計を立てて社会課題に取り組む。それはいいことなんじゃないでしょうか。大学の研究者に少し似ているのかもしれない。授業と研究の二兎を追う。社会問題を我が事と意識としてやっている人が増えるっていうことはいいことだと思いますか。「税金払っていいばいばい、あとは行政の責任でやってください」という風潮は社会の退化だと心配しないでいいんじゃないでしょうか。世のために何かをしようと思っっている若い世代を応援したいと思います。

私が福祉とか教育とか環境を中心に話し

ているかというところ、九州に赴任してきてすぐ産業別GDPを調べたんです。半導体とか造船は今でも高いのかとか…正解は医療でした。

—そうなんですか。

教育も大きい。製造業はさほど大きくない、ただ一人当たりの付加価値、年収という意味では大きい。

—意外でした、医療ですか。

医療、教育、福祉…大きいです。税金を含めて買い物をしている大きなマーケットなんだなど。社会保険の分野とか、公教育に新規参入するのは難しい。既存の主体に税金がいったい投入されている、ハンデが大き過ぎる。同時に、税金がたくさん投入されている。言うことは、その運営に厳格なルールが伴う。その結果、利用者からすれば空白のサービス、空き地がある可能性がある。現に、高校の先生が手一杯で、公営塾が空白のサービスをしています。学校の先生が働きやすくなるために、地元で空白のサービスを増やすのはいいことだと思うんです。学習塾だけじゃなくて、人格形成とかキャリアデザインとか。先生目線と生徒目線で地元の教育をデザイ

ンをしていく。そこに地元の市町村がお金を支援する。公立学校とそれ以外のサービスを合わせて充実するために。

—あとはプレゼンですかね。

はい。それに近い例が「高校魅力化プロジェクト」の取組じゃないかな。これに学校以外の教育サービスの魅力化を組み合わせる。—現場はそうはとっていないと思います。また新しい何かを持ってきて、みたいな感じ…。

延命装置とか救命装置みたいにな？規定演技を超えて自由演技をするという発想はどうなんでしょう。先生がいきいきするとう発想が弱いのでは？地域本位、生徒本位と並んで先生本位も等しく大切だと思っんです。先生はドラえもんだから頼めばなんでもしてくれるともう言えないですよ（笑）。—言われつつ放しです（笑）。我々は「自由演技をしなさい」という規定演技をさせられているんじゃないかと思っっている所がある（苦笑）。—そうなんですね（苦笑）。—そう受け止めるのもおかしくない。

—だから自由演技をしようと思っっているから、「させられている」という発想がどこか抜けない。

分かります。学校に責任持つて言える人は

いないです。みなさん頼りにしっぱなしでした。ごめんなさい（笑）。

—本日はありがとうございました。

（取材データ）

令和3年12月8日

聞き手 山内省二